

畑地かんがい特別顧問

ビショップ教授

—その人間寸描と勧告要旨—



公団の担当職員を前に最後の講義をされるビショップ教授

□ビショップ教授の印象□

アメリカ・ユタ州立大学かんがい・土木工学担当主任教授 A. アルビン・ビショップ博士は、公団が委嘱している畑地かんがい農業特別顧問団の主任である。当年として44才の少壮学者であるが、さすが「若い国・アメリカ」でも、この若さで州立大学の主任教授というのは異例にぞくするといわれる。かんがい排水工学の分野では、すでに世界的権威と目されるゆえんである。

教授はほかに I. C. A や F. A. O などの顧問技術員を兼ねておられ毎年各国からの招へいが引きも切らない。しかし教授の「愛知用水びいき」はまことに驚くべきものがあり、報酬その他の条件が他に比べて必ずしも有利ではないにもかかわらず、31年度から本年度まで引続き3回にわたって来日されている。

教授に接してみても一番感銘を受けるのは、その学者としての真摯さそして人間としての純粋さであろう。話題が専門の領域に入ると、にわかには表情はしまり眼もするどく輝いて、少しトツ弁だが口調に熱がこもってくる。プロフェッサーの風格がおのずからにじみ出てくる。それがふだんに返って破顔一笑すると、今度は朴ツな田舎の牧師さんといった感じで、いかにも親しみやすい。教授はご存知のとおり熱心なモルモン教の信者である。牧師さんの印象もあたらないわけではないが、ただモルモン教は例の一夫多妻主義で好奇的な意味で知られた宗教である。清廉高潔の風ある教授とこの一夫多妻は、どう考えても結びつかないのだからねてみると、この主義は18世紀の末ごろ教条からはずされておられ、現在ではもはや笑うべき過去の遺物でしかないとのことだった。

酒もタバコもたしなまない教授の日常は、学者としての生活に徹して厳格をきわめておられるらしいが、かといってコチコチの信心家タイプでは決してなく、考え方も市広く人間味も豊かで、ユーモアとウィットに富んだ話しぶりが人を魅する。

戦後の道徳について（特にアメリカでも批判されているという「太陽族」の生態などについて）教授のお考えをきいてみたが、それに対する見解はあくまでクリアな宗教的信念に立つ明確な楽観論でこちらが期待した懐疑的なかけや含みなどは一かけらもなかった。べつに深遠な哲学的考察や警世の言葉をきくつもりはなかったが、戦後の風潮に対してさえ、少し物足りないさを感じさせるほど、教授の道義感には健全な微動だもしないように見受けられた。人間、さらに学者としての純粋なバックボーンと揺ぎない宗教的信念、まさにこの二つのものが教授をしてかくも堅固な場所に立たしめているのであらうと思われた。なおアンナ夫人はローガン地方で「菊の女王」として有名で、現在も175種類にのぼる菊の栽培に丹精をこめておられ、また子供さんは2男2女の由である。

□ビショップ教授の勧告□

さてビショップ教授は、31、32、33年と愛知用水事業のために連続3回にわたって来日されたが、ここでビショップ勧告の要旨をダイジェストしてみよう。（なお本年度の勧告はまだ発表されていないので、以下は主として32年度までの勧告要旨である）

(1)畑地かんがい組織を決定する基準として、畑地の「インター・レート」つまり「かんがい水の浸入率」の測定方法を指導された。これによって、愛知用水地域の大半は地表かんがい、特に等高線う

ね間かんがい組織を採用できることが明かにされた。

(2)等高線うね間かんがい法の適用によって、傾斜した畑地の地盤造成作業が不要あるいは作業量を激減できることが明かにされた。

(3)畑地かんがいは、昼夜24時間の送水制度を図り、圃場かんがいは「ローテーション・システム」つまり「輪番かんがい法」を採用すべきことを明かにされた。

(4)日本における畑地かんがいの「かんがい効率」を速かに実測すべきであること、また愛知用水計画における「かんがい効率」の設計基準を60%以内とすべきことを示された。

(5)畑地かんがい技術の急速な導入と普及のための具体的方策を次のように示唆された。

イ、先進国からの権威者の招へい。

ロ、日本人技術者の養成訓練。

ハ、実験農場の拡充。

ニ、主要畑作物、土壌、かんがい方法、分水装置等に関する各種の実験究明。

以上のほか支流線水路の設計に関連する技術的諸問題について種々の有益な教示があった。そして最後に建設期間中および将来の管理運営段階における通信連絡組織の整備（超短波無線による）を強調されている。

33年度は、前年度に引続いて各種の問題および事業の進捗に対応して生じた各種の事項について調査、検討、説明を行うとともに、かんがい組織を運営する事業体の設立、およびその運営、管理などの新しい問題について解説を行った。

なお教授の滞り期間中において、I. C. A の J. C. マール氏および F. A. O の M. R. ルイス氏（いずれも土壌保全技師）も随時に同行され、教授および公団側との間に討議が行われた。

□あとがき□

畑地かんがいは日本の農業にとって、全く新しい分野である——という表現には、いろいろの意味を含ませることができる。

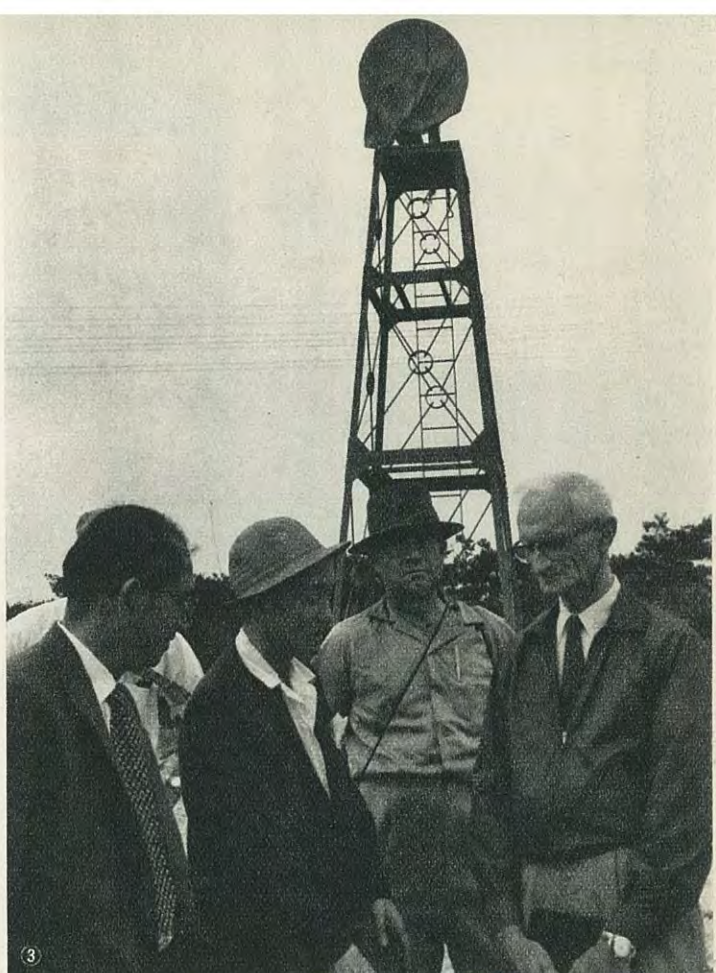
同じ農業分野の問題であっても、畑地かんがいの問題は、水田農業における耕種法の改善とか品種改良とかいった単なる技術的なそれとは、全然異ったカテゴリーにぞくしている。また畑地かんがいの導入は、誰よりもまず個々の農家自身が決定しなければならぬ問題であることや、その導入を容易にするためには各種の背後条件を整備しなければならぬという問題など、畑地かんがいをとりまく課題はかなり多い。

愛知用水計画にとって、畑地かんがいは大きな特色の一つと目されているが、その実現の前には、やはりさきにあげたような課題が横たわっている。これらをどう克服し打開してゆくかは、より多く農業政策的な問題であるから、公団の直接担当すべき任務ではないかも知れないが、しかしビショップ教授もいわれるように、畑地かんがい技術に関する諸問題の究明は、やはり持続的かつ徹底的に実施されてゆくべきであろう。たとえるなら、その任務は「畑地かんがい」という新しい路線を建設するために、要所要所にベンチ・マークを設定してゆく、という重要な任務に外ならないからである。

（注：次頁に掲載した写真はビショップ教授一行の現地調査の際のスナップであるが、写真説明はいわゆる「顧問役務報告」の内容とは無関係であるものが多い。この点ご了承をこたい）

写真説明

- ① 傾斜地に設けられたパイプ給水路の分水施設を
みながら討議が交される（於東海近畿農試）
- ② 傾斜地の末端給水栓の説明をさく（前同）
- ③ 霜を消す送風塔の下で……（前同）
- ④ 牛舎をのぞいて酪農による農業経営の合理化が
論じられる（前同）
- ⑤ 乾燥中のナタネをみて“これからしぼった油で
フライをつくる”と説明すると“オオてんぶら！”
とちゃんと心得ておられた（前同）



- ⑥ 機械開墾地で土壌を調べる。土壤保全技師のマ
ール氏が同行しているので、討議に時間を忘れ
あくことを知らない（三好地区）
- ⑦ 曲り池分線で施工状況を見る
- ⑧ 田植風景にいたく興味をおぼえ、ぬかるあぜ道
を歩いて熱心にカメラを向ける
- ⑨ 開拓地で機械力による地盤造成状況を見る（三
好地区）
- ⑩ 折からの降雨のため現場詰所で計画図を展げて
共同討議（ルイス氏だけ写っているがビショッ
プ教授も同席している）

